ガーリブと年金訴訟

片　岡　弘　次

1．はじめに
2．衰退してゆくムガル朝
3．ガーリブと年金訴訟
4．ガーリブと同じ運命をたどるムガル朝の皇帝

一、はじめに

ガーリブは今から2百年前に生まれ、ムガル朝の崩壊を見とどけた詩人である。その詩はインド・パーキスターンで今でも多くの影響力を与え、人々に愛誦されている。ガーリブの『ガーリブ詩集（ディーワーネ・ガーリブ）』はイスラーム教徒が西の世界からもたらした三つの文化遺産の一つとされる程である。他の二つはタージ・マハルとウルドゥー語だという。さらにまたインドでは『ヴェーダ』と共に2大啓示書の一つとする人もいる。

だがガーリブの人生を見ていくと今まで気になることが二つあった。一つはガーリブの年金訴訟問題、他は1857年、インド大反乱の時、ペルシア語で日記をつけ、それを『ダスターンブーイ』としてイギリス政府に献上するくだりである。

年金訴訟問題の発端はガーリブの借金返済問題から始まった。1826年の末よりガーリブは、そのために2年間を費しデリーからカルカッタに

行った。結果は敗訴であった。だがその後、ガーリブは30年間もそれにこだわり続けた。そのこだわりは単に金銭的な問題だけではなかった。それは亡びゆくムガル朝の中で、貴族として生きるガーリブの体面とも関係があった。

この様なことについて Pavank. Varma の GHALIB を台本にして述べたい。

二、衰退してゆくムガル朝

ガーリブが生まれた1797年までには、ムガル帝国は衰退してしまっていた。第７代皇帝オーラングゼーブ（在位1658年～1707年）の広大な領土も１世紀が過ぎると、デリーとその周辺数マイルに縮少した。1788年第15代皇帝シャー・アーラム２世（在位1759年～1806年）はデリーを陥れたローヒラーのグラーム・カーディルによって盲目にさせられ、投獄させられた。グラーム・カーディルが引きさがると、マラーターがデリーを占拠し、広場で王家の人々を辱めるのはローヒラーの上を行った。1803年、イギリス軍がデリーの近郊の村でマラーターを打ち破った。皇帝シャー・アーラム２世はこの戦いの様子をレッド・フォートのバルコニーで見ていたと言われる。イギリス軍の指令官であったランド・レイクは1803年９月16日より拝謁を許され、間もなくイギリス軍の永久支配権が確立する。

ムガル朝の皇帝はイギリスによって年金受給者とされ、その額は年間115万ルピーであった。イギリス軍のインド支配者はカシミール門のすぐ外に居を構え、その支配権を握り、ムガル皇帝の統治は単なる法的なものになってしまった。

これがガーリブが生まれた頃のデリーの政治的な様相であった。法律的な解釈ではムガル皇帝が主権者であった。イギリス軍は1764年、バク

サルの戦いの勝利の後、1765年ムガル皇帝からベンガルの徴税権の許可を得ることに成功した。この権利を持つ状態は1765年以降ずっと続いた。それ故理論的にはイギリスは、ムガル帝国の機構の中で臣下の関係であった。だが名目上、イギリスに完全な政治的支配を確立させる道を開いた。これを確実にしたのはベンガル総督ウェルズリ（在位1798年～1805年）の政策であった。イギリスが自らを支配するに価する征服者の代表と考えると、ムガルの諸王は、年金を得ていることを気付かないことはなかったが、臣下から期待される行為を無礼なことと考えた。

ムガル帝国はなお、抵抗しがたい雰囲気を持っていた。ジャート、ローヒラー、マラーター、そしてイギリスも事実上の権力に正統性を与えるために、ムガル皇帝の名を必要とした。皇帝には力がなくなったとはいえ、レッド・フォートの壁の中では、その令状はこの上ない権威があった。皇帝やその一族は外交的特権を持ち、依然として宮廷の儀礼は続き、インド総督代理も、宮殿に入る際、検問所で馬を降り、他の臣下のように残りの道は歩いた[1]。力はなかったが皇帝は王位の風格を残していた。第16代皇帝アクバル２世（在位1806年～1837年）が1828年、当時イギリスの最高司領官を迎えた時、そこにいたイギリス人がその謁見の様子を日記につぎのように記している。「偉厳を重んじるかつての君主は、最高指令官が近づいてくる間、一瞥もしようとしなかった。そして王は、一行の他の者たちにも顔すら向けなかった」[2]

疑いもなく皇帝には過去の偉厳はなかった。しかし社会的、政治的組織の軸であった。何かの儀式の時には真珠、珊瑚、銀などで身を飾って出た。皇帝の誕生日は祝日であり、もし病気になれば、その全快祝いは公式の洗浄の儀式として行われた。宮廷の掲示で毎日、皇帝の様子が人々に知らされた。デリーの人々にとり、王座から衰微の光が出ていたとしても、支配者であることに変わりはなかった。近隣諸国の後継者の

決定に対してはムガル皇帝に報告があった。

ガーリブは封建貴族の一員であることに強い誇りを持っていた。そしてムガル支配を確立させたトルコ族の血を引いていることにも同様に強い誇りを持っていた。ガーリブにとり、ムガル朝支配の継続の正当性はデリーの他の市民のように当然なことであった。そしてガーリブはムガル朝の宮廷に出入りすることをアーグラからデリーに出て来た時以来、望んでいた。ガーリブはムガル朝を「わが祖先の最初の住み処」と主張し、重要なものと考えていた。1854年、イブラーヒーム・ゾウクの死により、皇帝バハードゥル・シャー2世の詩の師(ウスタード)に任命された。これより4年前、皇帝バハードゥル・シャー2世はガーリブにペルシア語でムガル朝の王朝史を書くことを依頼していた。そして今後は、佳冠詩人としてガーリブの役目は、ムガル朝の統治の賛辞を書くことであった。皇帝バハードゥル・シャーをあまりよく思っていなかったが、ガーリブは君主制や皇帝自身を軽視するようなものは書かなかった。1857年の反乱の時の親英的な日記『ダスターンブーイ』でも、皇帝に関しては軽蔑したような調子はなかった。ムガル皇帝はガーリブにとり、ガーリブが支持した社会的秩序の中心的存在であった。君主制の継続は、ガーリブ自身の立場を正当化するものであり、ガーリブが貴族制社会の一員として存在することを保証するものであった。

皇帝バハードゥル・シャー2世の時、デリーを訪れたイギリス人のジャーナリストはつぎのように記している。

「王宮の華麗さのまじめくさったごまかしの中で、様子は皇帝だが、事実は奴隷である子孫が空虚な統治を続けている。王は王座に座り、笏を持ち、召し使いを持ち、従者を従え、武官を持っている。だがイギリスは王国を持つ。皇帝は大王のように振る舞い、外国からの訪問者を受け

入れ、安っぽいけばけばしい衣装で身なりを飾っている。宝石や王衣を身に着けてはいるが、実体がなく影だけである。イギリスによりムガル朝の皇帝たちは黙認されているだけだった。しかし王としての権威はある程度、主張できた」[3)]

また当時、ムガル朝の皇子たちに言及し、つぎのように書いたイギリス役人もいた。

「これらの王たちは家族や自分を養うのに月10シリングも持っていなかった。だがイギリス政府の代表に手紙を書くのに、わが奴隷と呼びかけている。そしてその回答には、閣下の命令はあなたの奴隷により拝受されました、と言わせている」[4)]

時代はムガルの人々にとり終わりつつあった。そして全体としても封建貴族の権威も終わりつつあった。だがガーリブにとっては封建貴族の一員であることになお強い誇りを持っていた。

三、ガーリブと年金訴訟

貴族の一員として、そして都市の有力な詩人としてガーリブは何人かのイギリスのインド駐在外交官たちに知られていた。そしてその下の者たちとも仲がよかった。しかしイギリスとガーリブとの関係は、ガーリブの年金訴訟で正当性を求めるガーリブの長い闘いの中で、鋭い対立の焦点となった。

その発端はイギリス軍の下で400騎の長であった叔父ナスルッラー・ベーグ・ハーンが亡くなり、ガーリブが叔母の乳兄弟にあたるナワーブ・アフマド・バフシュ・ハーンを後見人とした時から始まる。イギリス政府はナスルッラー・ベーグ・ハーンの領地を没収して、代わりにガーリブを含む叔父の遺族の年額１万ルピーの年金を定めたがナワーブはその内３千ルピーしか渡さなかった。ガーリブの受け取り分は750ル

ピー、弟ユースフも750ルピーであった。だがナワーブは、その750ルピーをも渡すことをせず、贈物でお茶を濁すようになった。しかし妻ウムラーオ・ベーガムの父イラーヒー・バフシュ・ハーンが亡くなるとそれもよこさなくなった。

ナワーブには2人の妻がおり、最初の妻との間に息子シャムスッディーン・アフマド・ハーンがいた。2番目の妻にも2人の息子がいた。ナワーブは亡き後の相続争いを危惧して1826年に隠退し、最初の妻の息子シャムスッディーンに領地を譲った。すると新しくなったナワーブはガーリブなどの年金を完全に無視してしまった。それはガーリブがナワーブの2番目の妻の2人の息子と仲がよかったからであった。

アーグラからデリーに出て来て間もなく、ガーリブは自分の収入の範囲では生活ができない位になっていた。母親が生きている間はその方からの援助があったが、死んでしまうとその収入源はつきた。更に悪いことに1826年弟のユースフが精神病を発病し、その治療代に年600ルピーが必要になってきた。そこでガーリブは叔父ナスルッラー・ベーグ・ハーンが亡くなった時、即ち1802年に定められた年金の中で正当な取り分を主張するためにカルカッタに向った。

その正式な取り分については、1804年5月4日、ロード卿によって出された文書の中で証明され、カルカッタの総督も承認している。それによれば年金が2万5千ルピー与えられ、1万ルピーがナワーブ・バクシュ・ハーンの取り分、その残りがナスルッラー・ハーンの関係者の分である。だがアフマド・バフシュ・ハーンは、1806年6月にロード卿によりナスルッラーの関係者は5千ルピーになったと主張し始める。そしてそれについての新しい証明書も出たと主張する。このようにして元金を減らし、さらに渡すことさえもしなくなった。

ガーリブはこの二番目の文書を文書偽造、すなわちアフマド・バフ

シュ・ハーンによってごまかされて出てきたものと主張した。事実、第二の件についての報告書はカルカッタのフォート・ウィリアムにはなかった。[5)]

ガーリブの訴訟は正当な理由に立脚していた。それ故、イギリスのその筋の人に彼の訴訟を個人的にも印象づけようと、1828年カルカッタへの困難な旅をした。その後20年間あらゆるレベルでの努力がされ、デリーのインド総督代理、アーグラの総督代理、カルカッタの知事、ロンドンの東インド会社のダイレクター、しまいにはヴィクトリア女王とも争った。しかしすべて無駄であった。ガーリブはイギリス人の中にパトロンを持っていなかった訳でもなかった。個人的なパトロンの支援にもかかわらず、イギリスの態度はこの寄生的な階級である貴族階級の主張に対し、厳しく対処することであった。

ガーリブは、彼の祖先によってイギリスに対してされた奉仕に対する見返りとして、年金を受けることを当然のこととして考えた。だが新しい世代のイギリスの役人はこの永続的な結合関係を疑問視し始めていた。しかし当時ガーリブはどうしようもない程の借金を背おっており、その返済のため、死にもの狂いで年金の増加が必要だった。だが威厳をもって自分の立場を落とすことなく、当然受けるべきものを得ようと望んだ。

カルカッタに来ているガーリブにとり1829年、デリーからフランシス・ホーキンズの回答は我慢ができるものでなく、ガーリブは上訴した。レイク卿の署名のある書類も何ら役立たなかった。それが再びボンベイのジョン・マロン卿のもとに送られたが、1830年11月3日、敗訴した。

すでにデリーに戻って来ていたガーリブにとり、1830年11月3日の敗訴は自然とガーリブの不安定な家計にさらに打撃を与えた。カルカッタから戻って来た時、4万ルピー以上の借金があり、借金はかさむばかり

で、最早以前の様に貸す人も少なくなってしまった。その様な状態の中で、そしてまたガーリブが一員であった封建貴族の中で、敗訴はその名声に屈辱的であった。その祖先が権力を持ち、豊かであった貴族として、そしてイギリス人からも一目おかれてきた貴族として、その敗訴は社会において彼の立場に影を落とした。

それ故、1930年の敗訴以後、以下の通りの様な訴えや行動を取らねばならなかった。

1830年11月、敗訴の連絡を受ける。

1831年11月、デリーで個人的に総督に訴える。

1832年４月、総督に再審要求の手紙を出す。

1833年４月、第１書記のスウィントンにも再審要求をする。

1836年６月、総督代理が判決を下す。その判決には総督の署名がある。

1836年10月、上記の判決についてデリーの代理人より連絡を受ける。その連絡を受けるやただちに、オークランド卿に手紙を書く。

1836年12月、ペルシア詩の頌詩を第一書記マドックに贈る。

1837年４月、36年10月の手紙の返事を待ち、催促の手紙をイギリスに送る。

1842年２月、「この主張は否定されている」との一行だけの回答が送られて来る。ヴィクトリア女王に手紙を書く。

1842年８月、第一書記マドックに手紙を書く。

1856年、　インド総督キャニングに手紙を書く。

1833年４月、第一書記スウィントンに書いた手紙はつぎの通りである。

「あなたならお分かりになっていただけると思います。わが父アブドゥラー・ベーグ・ハーンはインドにイギリスの支配が確立する前に亡くなりました。その時私は９才でした。そして私の叔父ナスルッラー・ベーグ・ハーンが当時、アーグラを支配しておりました。1803年レイク

卿がアーグラを攻ると、ナスルッラーは城を明け渡しました。そのためイギリス政府より賞が与えられ400騎の指令官とされ、月々1700ルピーの俸給が与えられました。さらにアーグラの地区にあるソンク・スィルサがイギリス政府より封土としても与えられました。その詳細はイギリス側の記録にもあるはずです。どうかイギリス側の記録によりナスルッラー・ベーグ・ハーンの人と人物を確かめて、私に証明書を出して下さい。私の訴訟について聞いてください。私にそれ相当の対応をしてくれるイギリス人に会えるようお取り計らい願います」[6]

ガーリブは自分の身分を証明するための証明書を要求しているが、当時インドの貴族に対してイギリス側の冷たさが出ていることが分かる。

1836年12月、第一書記マドックに出した手紙はつぎのようである。

「神を讃えよ。今、統治者は正義を行い、その価値をよく認識しております。しかし私はこの幸せな時、私のことが未解決なまま放っておかれ評価されていないとお伝えしなくてはならず残念です。

私はあなたのためにガザルを、総督のために頌詞(カスィーダ)を作りました。その中で私は、私の願いを書かせてもらいました。どうかご都合のよい時、あるいはクリスマスの時、お読みになっていただきたいと思います。

私は閣下がそれにサインをし、私の好意に報いてくださることを確信いたします。そして閣下がその詩をペルシア語の新聞に載せて下されば、私にとり大変嬉しいことであり、希望を抱かせてくれることになります」[7]

この手紙でも第一書記の署名を求めている。更に送った詩をペルシア語の新聞に載せてほしいと頼んでいる。ガーリブは証明書が得られる確信はなかった。だが第一書記に送ったガザルと頌詩が新聞に載ったら、ガーリブの訴訟に関係しているイギリスの役人に効果を及ぼすことになると考えていた。

当時の社会で貴族としての伝統的な立場を守るためには年金訴訟で好ましい結果を得ることが必要であった。イギリスに手紙を書いたのは詩人のガーリブとしてでなく、アーグラの地区でもと領主であった故ナスルッラー・ベーグ・ハーンの甥としてであった。それ故手紙はへつらうものでなかった。

1836年11月、オークランド卿に出した手紙の最後の部分では「閣下がこの訴訟に関する書類をすべてつけて、イングランドに出してくれることを願います。そしてそれが国王の前で審議されるようお願いいたします」[8] と述べている。

当時、貴族でも総督に手紙を書くことはできなかった。総督以上の女王に直接手紙を出すことはなおさら出来ないことであった。だがガーリブは大胆にも書いた。貴族の一員として、有力な詩人として、それを無礼とは考えていなかった。市民は主権者に直接訴える権利がある、女王に直接手紙を書く権利があると考えていた。

ヴィクトリア女王はガーリブの請願書を読まなかった。ガーリブが催促して得た回答は「女王はこの件に関し、どんな係わりも持ちたくない」[9]であった。ガーリブの訴訟はそれ以上どんな進展もなかった。その書類はロンドンの東インド会社の整理棚に入れられているままであった。

1857年のインド大反乱の後、ガーリブの主な関心は以前の通りの年金の再開であった。30年間も闘ってきた年金の増額の問題はもはや問題にもならなかった。

四、ガーリブと同じ運命をたどるムガル朝の皇帝

ガーリブは自分の取り分と考えていたもののために闘った。イギリス勢力の統治の合法性について争うことはガーリブの意図ではなかった。半植民地的状況の中でナショナリズムはまだインドに芽生えていなかっ

た。

ガーリブの父は傭兵の最もよい伝統の中で、ムガル朝の皇帝シャー・アーラム２世、アワドの大守アサドゥラー、ハイデラーバードのニザーム・アリーハーン、そしてアンワールのラージャ・バクタール・スィングに仕えた。ガーリブの叔父はマラーターからやすやすとイギリス軍へ変わった。すなわちガーリブの一族の者は、デリー、ラクナウ、ハイデラーバード、アンワール、アーグラと仕え先を変えた。当時、誰に仕えるかを判断する機敏さが生き残りを可能にさせた。イギリスがデリーに足場を固めた1804年、ガーリブはわずか６歳であった。それ故ガーリブはイギリスの存在を当然なこととして育った。ガーリブにはイギリス人の友達もいた。産業革命を終えたイギリスの科学や産業を賞賛し、イギリスがインドにもたらした無線や郵便制度も評価した。そんな訳でイギリスの力を受け入れる気持はあった。しかし伝統的な貴族として、自分の存在を否定してまで受け入れることはできなかった。ガーリブはイギリス人の正統性に疑いを投げかけることはしなかった。しかしまた熱心に自分自身のことも主張した。ガーリブは初めから、もしイギリスがその訴訟で最終的な調停者となる力を持っていたら、ガーリブは貴族としての体面を汚さないで協力を求めようとした。ガーリブは協力を求めるために、彼等を賞賛する頌詩（カスィーダ）を書いた。それは相手から恩恵を引き出すためのものであったが、その賞賛が偽善的なことであることは相手も承知していた。

ガーリブは敗訴した。というのはイギリス政府はガーリブの訴えに基づき裁判をするどんな意図も持ってなかった。彼等の関心はインド支配を強固にすることだけで、インドで年金暮らしをする貴族の自由を不適当と考えていた。

ガーリブがこの年金訴訟で受けた扱いは、ムガル皇帝の場合も同じであった。

1805年、ウェルズリはアクバル・シャー2世に年150万ルピーの年金を払う約束をした。後でイギリスは120万ルピーを越えてそれを増すことを拒否した。アクバル・シャーは契約の不履行に抗議したが、効果がないと分かると、使節ラージャ・ラーム・モーハン・ロイをイギリスに送った。だが結局、年金は増額されず、またムガル朝の後継者を選ぶことも、ムガル朝の手から離れてしまった。

ガーリブがしたと同じような請願が皇帝バハードゥル・シャーによってもイギリスの王に対しされた。最早、ムガル朝皇帝の任命権もムガル朝の手にとどまらなかった。法的にはイギリスはインドの封臣であり、謁見もしなければならなかったが、その慣習も終わろうとしていた。ガーリブと同じ仕方で皇帝バハードゥル・シャーは総督につぎのように書いている。

「私は、正義と自由を重んじるあなたにつぎの通りお願いいたします。カルカッタにある政府の記録を調査していただきたい。そしてそのような指示がヨーロッパの方から出されることを願います。過去2年間の宮廷への贈物について検討していただき、必要なら何か命令を出してほしい。そうすることであなたの命令は高まり、こちらは感謝いたします」[10]。つまり宮廷への贈物の制度も1851年で終わってしまい、経費は増額されなかった。そして後継者を選ぶこともムガル朝自身ではできなくなってしまった。

ガーリブが闘い失なったものを皇帝バハードゥル・シャーも失なった。二人の権利を強化するどんな手段もなかったので、二人は法的な保障を獲得するために闘った。両者の訴訟は法的には合法的であった。両者はデリーのイギリス役人を越えて、ロンドンの裁判所に訴えた。これが無

駄に終わるとイギリス政府にも訴えた。これは両人の地位にふさわしい訴え方であった。しかしムガル皇帝もガーリブも同じ犠牲者となった。

レッド・フォート内のムガル朝皇帝によって保持されている力は、普通の人の目にはなお存続しているように見えた。しかしガーリブにはムガル朝皇帝の権威がすたれ、かってなく辱められていることはよく分かっていた。

18世紀の3人の偉大な詩人ソウダー（1710〜1781）、ミール・ダルド（1720〜1784）、ミール・タキー・ミール（1723〜1810）も彼らの時代の出来事を同じ受け取り方をした。ソウダーは広まってくる混乱状態と無政府状態、ムガル朝の皇帝の無力を嘆いた。ミールも同じであった。1788年アフガニスターンのグラーム・カーディルによりムガル朝皇帝シャー・アーラム2世が盲目にさせられたことは、デリーのあらゆる人々の気持を動転させた。それを詩にしたのがミール・タキー・ミールであった。

ガーリブの時代には大変動と精神的な衝撃が起こることは、イギリス支配の強化により抑えられていた。しかしその静けさの中に、ガーリブは何か基本的な変化が起きつつあることを感じ取っていた。

ガザル121-10

Nah luṭṭā din ko kab rāt ko yūṅ be khabar sōtā

Rahā ḵhaṭakā nah chōrī ka du'ā dētā hūṅ rahzan ko

昼間盗まれていなかったら　夜どうしてこんなに安心して眠れるか

泥棒の足音がしない今　泥棒に祝福を[11)]

ガザル119- 4

Ghālib kuchh apnī sa'ī se lahnā nahīṅ mujhe

Khirman jalē agar nah malakh khāe kashit ko

ガーリブよ　わが努力ではどんな果実も得られない
いなごに食い荒されずにすんでも　雷が燃やしてしまい[12)]

中世の伝統の中で、職業的詩人の主な収入源は王による保護であった。もし詩人が気前のよい大帝国的な時代に生きていたら、王による多大な援助も期待できた。皇帝バハードゥル・シャー・ザァファル自身も詩人で、また詩人たちのパトロンでもあった。政治的・経済的情勢は、皇帝に詩会での詩の観賞ぐらいの余裕しか残させなかった。詩人の財政をうるおす程豊かでなかった。

イブラーヒーム・ゾウクが詩に関して皇帝の師（ウスタード）であった。皇帝が佳冠詩人としてゾウクを選んだことをガーリブは憤っていた。

ガーリブの隠れた憤りは、その書き方から明らかである。皇帝に頼まれて書いたムガル朝史の前書きのところで、ムガル朝第5代皇帝シャー・ジャハーン（1628～1657）の時代を思い出し、当時の詩人カリームに、ガーリブの時代と較べ、多大の金、銀などを与え厚く保護していると述べている。

過去のこの様子は現在のガーリブの年金と鋭く対立する。当然のことながらガーリブは現在に対して過去を引き合いに出すことを選んだ。ウルドゥー語よりペルシア語にガーリブが優越性を与えたことは、ガーリブにとってはありえることだった。ウルドゥー語はムガル朝末期、人々に使用される生きた言葉で文学用語にもなっていたが、政治的混乱の衰退の時代の産物であった。それはムガル朝第3代皇帝アクバル（1556～1605）や第5代皇帝シャー・ジャハーン（1628～1657）の時代のような強力な時代の言葉でなく、また宮廷の言葉でもなかった。新しい文学の開花の兆候にはなりえたが、ペルシア文学にあったような強い封建領主の用語ではなかった。

ペルシア語は生きた言葉としての価値をムガル朝末期には失なってしまっていた。というのは歴史的理由で、ムガル朝自身は、合成インドの文化の創造に関係していたからであった。しかしガーリブにとり、ペルシア語を理解し、観賞する人が殆どいなくなってしまったことは、ガーリブが時代にそぐわなくなった充分すぎる程の証明である。

註

1）Akhtar Qamber, The Last Mushairah of Delhi, New Delhi, 1979, P.44.
2）Captain Mundy, The Journal of a Tour in India. Vol.I, P.83.
3）William Knighton, Tropical Sketches or Reminiscences of Indian Journalist Vol.I, P.301.
4）W. H. Sleeman, Rambles and Recollections of an Indian Official. Vol.II, P.280.
5）Pavank. Varma, Ghalib, New Delhi, 1988, P.16.
6）National Archives of India, Foreign Political Consultations P.88-81.
7）Oriental Records 420 of 1833, Foreign Political Consultations, 4 January 1836, No.51.
8）Foreign Political Consultations, 5 December 1836, Nos. 157～161.
9）Indian and Bengal Despatches, Vol.45, P.21.
10）P. Spear, Twilight of the Mughals, London 1951, P.57.
11）Ghālib, Diwān-e-Ghālib, Ferozson Lited, 1989, P.116.
12）Ghālib, Diwān-e-Ghālib, Ferozson Lited, 1989, P.113.